

氏 名	宮下 陽
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第38号
学位授与年月日	令和6年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題 目	学位論文題目 高光混水の応用と展開による染付表現 －古典的描画技法における歴史的体系化の可能性－
	研究作品題目 作品1《青街図陶板（Ⅰ）》 作品2《青街図陶板（Ⅱ）》 作品3《青街図陶板（Ⅲ）》 作品4《青街図陶板（Ⅳ）》 作品5《青街器「あわひの景」（Ⅰ）》 作品6《青街器「あわひの景」（Ⅱ）》 作品7《青街器「あわひの景」（Ⅲ）》 作品8《青街器「あわひの景」（Ⅳ）》 作品9《青街器「あわひの景」（Ⅴ）》 作品10《青街器「あわひの景」（Ⅵ）》 作品11《青街器「あわひの景」（Ⅶ）》 作品12《青街器「あわひの景」（Ⅷ）》 作品13《青街器「あわひの景」（Ⅸ）》 作品14《青街器「あわひの景」（Ⅹ）》 作品15《青街器「あわひの景」（Ⅺ）》
論文審査委員	主 査 教 授 梅本 孝征 副 査 教 授 長井 千春 副 査 教 授 阿野 義久 外 部 出光美術館 学芸部学芸課 審査委員 学芸課長 徳留 大輔

1 学位論文の要旨

本研究は、染付の描画技法の歴史について考察し、古典的描画技法の実験を通して検証し、応用することで、創作表現としての可能性を探求するものである。本研究における「古典的描画技法」とは、おもに中国の元代（14世紀中頃）から清代康熙年間（17～18世紀）頃までの染付に用いられた、筆彩による描画法のことである。その中で、「高光混水」（Gaoguang Hunshui）とは、清代康熙年間頃の染付において、特に山水の表現に見られた描画表現のことである。それは、山や岩の頂点に光が当たった部分を白く塗り残し、その両側をグラデーションをつけて彩色して、陰影や量感を描き表わす。本研究では、こうした染付の描画技法の歴史的変遷について考察し、描画表現として「高光混水」から応用、展開した新たな創作を提示する。

本論の第1章では、染付についての概要と「高光混水」に関する先行研究、研究に至っ

た経緯、研究目的について述べた。筆者は、一貫して染付で制作研究を行ってきたが、これまでの制作を通して、また、染付の歴史を学んでいく中で、染付特有のグラデーションを活かした繊細な表現の優れた点を再認識した。その上で、高光混水は、グラデーションを活かした表現として可能性を感じ、その応用的活用によって新たな創作へ繋がると考えた。

本研究の目的は、染付の古典的描画技法における歴史的体系化の一端を示すことを試み、創作研究によって染付表現の可能性を示すことである。現在、古典的描画技法の歴史的体系化と創作の双方向的研究は少なく、本研究は、技法的観点からの歴史研究を補完すると同時にさらなる展開を示すものであり、今後の染付研究にとって一助となることが期待できる。

第2章では、染付成立の経緯を材料と技法、歴史的背景から概観し、染付描画技法の歴史の変遷について考察を行なった。

染付誕生の背景には、元朝支配下の社会的、外交的政策が深く関わっていた。モンゴルやイスラームなど外来民族からの影響と、伝統的中国文化の融合によって、染付製造のための素材や技術、文様表現などの様式が確立されていったといえる。染付は伝統的に筆を用いた装飾技法として発展し、概ね、「輪郭などの線を描く」こと、「色面を塗る」ことを基本としてきた。また、効率的に製品を作るために、線描、色面彩色などの工程ごとに分業化が行われてきた。こうした分業によって、技法の専門性が発達し、それぞれの描き方がより高度な技術へ、また表現として優れたものへと発展していったと考えられる。

明・清時代に入り、染付の製造技術は高度に発達していったが、特に17世紀後半から18世紀前半の康熙年間ごろの染付において、グラデーションの効果を用いた表現が最も発達した。康熙年間には濃み技法(顔料を含む液を素地に溜めながら塗る描画法)が発達し、単なる濃淡でなく、陰影や量感を描写する染付作品が出てきた。康熙の染付では、とくに山水表現において高光混水が用いられ、山の峰を白く残し、濃淡の階調差を駆使することで、山の陰影や量感を表わしている。このような描画表現によって康熙の染付は、画面上に前景、後景という、多層的な空間の創出に成功した。それまでの染付に比べ、より絵画的で三次元的な文様表現に到達したといえる。

第3章では、歴史的考察から得た知見をもとに、描画法の実験・検証をおこなった。高光混水が用いられた参考作品《青花山水文瓶》(東京国立博物館所蔵)の熟覧から、描画法の実験、習作制作を通して、高光混水はグラデーションを活かした表現であると同時に、濃みをする際のストロークによってできた、「濃み跡」(濃みの際にできる液が流れた痕跡)を活かす表現であるとも考えた。

従来の濃みは、均一な色調で面を塗る方法であり、また、グラデーションをつけるにしても、一方向への色調変化を表わすのみであった。しかし、高光混水を実践的に検証し、筆のストロークや濃み跡の形を様々に工夫することで、モチーフの形態やその周囲の空間の描写など、より多様な描画表現が可能になるのではないかと、という知見を得た。

第4章では、博士課程における制作研究の展開と、研究作品の表現内容、制作方法について論じた。まず、研究作品1~4の《青街図陶板》の制作について論じた。《青街図陶板》は、これまで筆者が行ってきた、「轆轤で成形した器形上での文様構成」とは異なり、平面上で文様と余白との関係性を考察することを目的に制作した。この陶板は、外形をモチー

フとなる街の風景を連想させるような不定形にカットし、素地の余白を活かして、都市風景を構成するビルや川、高架橋として表わした。こうしたことで、余白を積極的な表現要素として用いる手法を見出すことができた。

陶板から立体作品へと展開した研究作品 5～11《青街器「あわひの景」》は、高光混水を応用した描画表現についての考察をふまえて制作を行なった。スポンジを描画材として利用し、濃みのような、グラデーションの効果が得られるか、また、モチーフである都市風景に合うような直線的な濃み跡を形成できるかを検証した。

検証の結果、スポンジの中であらかじめ顔料のグラデーションをつくっておき、スポンジを押し当てることで、スポンジ内のグラデーションが直接的に素地に反映されることがわかった。また、直方体にカットしたスポンジの、面や角を押し当てて彩色することによって、直線的な濃み跡を形成することが可能となった。スポンジを用いることの利点は、スポンジの中であらかじめつくったグラデーションが反映されるため、グラデーションの方向を筆よりも意識的に操作できることである。また、スポンジの形状がそのまま素地に写されるため、筆では難しい、直線的な濃み跡の形を形成することができる。

こうした検証から、淡い色から濃い色へのグラデーションの方向や、濃み跡の形成を、微妙に調整、操作することが可能となり、そのことによって《青街器「あわひの景」》では、都市空間の陰影や奥行きをより効果的に表現できるようになった。本章では、古典的な描画表現である「高光混水」から、スポンジという描画材を用いることで応用的に展開し、新たな知研を得ることができたと考える。

第5章は、本研究の結論である。研究の総括と今後の課題や展望について述べた。本研究は、「高光混水」という清代前期に見られた過去の描画表現を自身の制作研究に応用し、古典と現在を繋ぐ創作を実践するための、一つの方法論を提示した。

研究作品《青街図陶板》、《青街器「あわひの景」》は、いままで背景として扱われてきた余白を、文様や形を構成する上での積極的な表現要素として扱うことで、青で描かれた文様と白磁の白い形体とが相互的に関連し合う、染付としての新たな造形を展開することができた。また、「グラデーション」や「濃み跡」といった染付特有の描画効果を、現代的な都市空間の奥行きや広がりを表わす上で、有効に用いることができた。

本論では、清代前期の「高光混水」をテーマとし、描き方とそれによって表される文様に焦点を当てたが、描く方法だけでなく、釉薬の性質や焼成技術の中にも、見過ごされている部分があると考ええる。そうした意味で、描画技法の歴史的体系化については、その一端を示すにとどまったため、過去の染付においてどういった技法が扱われてきたのか、より詳細に整理、分類を行なうことが必要と考える。こうした研究は染付の歴史研究において技法的観点からの補完が期待される取り組みであり、今後も機会を得て、古典的技法や素材から歴史について考察し、創作へと展開する研究を継続していきたい。

2 学位論文審査の要旨

【論文】

中国における染付の発生からその完成期に至る歴史と作品を調査、研究した上で、染付における古典的描画技法の歴史的体系化の一端を試みる。また、そこから得た「高光混水」という描画技法の在り様を実験、検証を通じて詳らかにすると共に自らの作品制作におけ

る創作研究から現代における染付作品の在り様を考察している。第1章では自ら制作し続けてきた染付作品の検証を通じて本研究に至る経緯を記している。第2章では染付の歴史とその時代に制作された染付作品の古典的描画技法に関する調査研究をしている。第3章では第2章の調査研究から得られた「高光混水」という描画法に焦点を当て、東京国立博物館での「高光混水」を用いた作品の熟覧調査をおこなう。その調査結果を基に濃みにおける懸濁液の状態や筆使いの再現実験などを通じて、その技法的特徴や表現法としての優位性を詳らかにしている。第4章では染付の描画的優位性という知見に基づいて、色彩としての磁器素地の白色に着目することで現代における染付表現の可能性を自身の創作表現として示している。第5章における結論では、「高光混水」という古典的描画技法の研究を通じて、染付という描画技法の歴史的体系化の一端を示すことができたこと。また、「高光混水」の応用により現代における染付作品の展開を自らの創作研究として示すことで古典と現代を繋ぐ一つの方法論として提示している。東京国立博物館での染付作品の熟覧などの調査研究、「ハイライト混水」の実験による検証を重ねた結果として、独自の描画法を創意することで新規性に富んだ創作表現研究としての成果を得ることができている。また、制作者の立場で技法による歴史的アプローチをした研究は希少であること。本研究における専門性の高さ、独創性を鑑みると技法的側面から新規な知見を見出すことができる研究であり、今後の染付研究において日本、中国、イスラム圏、ヨーロッパなどに広がる染付作品の歴史的価値に伴い、制作者として国際的視野に立った貢献ができる可能性を拓くものである。

【作品】

学位授与審査に提出した作品、《青街図陶板Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ》(博士課程2年次制作)は、敢えて平面上での文様構成により、余白と文様の関係性について再考するために制作した作品で、都市風景が陶板外へと拡張してゆく視覚効果を得る為の不定形状の形体に水墨面に見る溜込みを染付に応用した新規な描法によってモチーフとなるビルや道路、河川などが白抜きを含めて描かれている。溜込みにより、藍が染まるように自然な諧調と深みのある斑模様を呈し、これまでにない豊潤な染付表現となっている。陶板の不定形の形体もあり、あたかも現代都市が拡張、拡大してゆく効果を得ることに成功している。本作品は、染付表現の特徴と優位性を充分理解した上で染まるように自然な諧調と深みのある斑模様が広い面積においても効果的に表現されたものとなった。塗り分けを可能とするその表現法から余白と捉えられる白にモチーフとしての具体性を与えることで現代都市の無機質な景観を複雑かつ軽妙に表現している。また、《青街器「あわひの景」(Ⅰ～Ⅺ)》は、先の溜込み法に変えて、「高光混水」の実証実験を重ねた結果からスポンジを使った濃みによる描法を独自に創意し、新たな表現効果を検証している。結果、染付特有の深みのある自然な諧調と連続性による動きのある様相を得た上で、既存の筆による「濃み」描法とはことなる独自の表現を得ることに成功している。また、素地の持つ白を余白としてでは無く、建築物の一部として表現するなど更なる具体性が与えられており、研究に即した形で独自の染付表現を確立させている。その形体においてもロクロ成形による筒を分解、再構成する新たな成形法により、都市風景を表現するうえでこの上ない空間性を持つ立体に仕上げている。提出作品の各々において、現代における染付作品としての新規性が示されており、

独創的な創作表現となっている。

【口頭発表】

口頭発表において、専門的研究テーマとしてキーワードとなる古典的描画技法と染付の解説に始まり、北京師範大学の陳殿氏の染付研究から得た高光混水の検証、自作の染付作品の継続的変遷を通じて本研究の目的を明確に示す。そして、染付描画技法の歴史の変遷を考察し、高光混水を中心に染付表現の在り様を検証した上で東京国立博物館での《青花山水文瓶》の熟覧を基にした高光混水の実験と検証結果を報告。そこから得た描画法における知見を創作研究へと繋げていく。創作研究では、都市風景の表現を陶板、立体として制作する工程での実験と創意工夫により論理的で的確な表現を見出し、古典と現在を繋ぐ創作を実践するための一つの方法論を提示したと結論付けている。また、更に描画技法の歴史的体系化の一端を示すことができたとして結んでいる。以上のように発表における研究内容において本研究の論理的適格性と高度な専門性を示し、創作研究での新規性と独創性、日本や中国での染付研究における技法的観点からの補完による貢献に値する研究であることが認められた。

以上のように、宮下陽はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

最終試験において、宮下陽は、染付の余白における問題提起から、歴史的古典描法の調査による考察と実証実験を通しての技法的検証。その中から自身の創作における問題解決を見出す方法論としての創意による描法の実験と創作に至る論述は、研究テーマに即した形で的確に捉えられている。特に研究における一連のプロセスは、美術史、陶磁史研究において第三者も検証できる方法であり、それが制作における優れた表現、技術によって創作研究としての本研究に十分に活かされている。また、その創作は、染付における余白の扱いにおける新たな表現と従来の器としての形体からの脱却による新たな造形もあり、染付技法研究における希少性と新規性から見出す独創的な創作研究として審査員が一致して高く評価するに至った。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。